夏目漱石と村上春樹

Junko Higasa

私が村上春樹作品を読むようになったきっかけは、最初に選んだ長編小説が「漱石の『明暗』の手法に似ているな」と思ったことである。それからこの人の他の作品も読んでみようとランダムに読み始めた。村上春樹作品は好き嫌いが極端に二分するという。それは夏目漱石か森鷗外かで好みがはっきり分かれるのと似ているかもしれない。それではどうして私はこの二人の作品が好きなのだろうか？と考えてみた。

まず文体についてだが、漱石は絵画的な言語表現と淀むことのない流暢な流れを持っている。村上氏は想像性をいざなう豊かな比喩が密集した言語表現をところどころに散りばめる。漱石の場合は視覚的情景を言葉に表し、村上氏の場合は聴覚的情景を言葉に表す。漱石の視点は人間の側から自然へ向かい、また人間の内部に回帰するという反復の中で人間の心の中にある自然と不自然を描き、その中から人間の目指すべき真の美を抽出しようとする。それは社会の一分子として生きる中で、いかに「人間」になるための道を歩むかという選択を提起する。対して村上氏は人間の持つ心の闇―意識するとしないに関わらず―実は誰もが持っている心の深い井戸の底へ自己の意識を掘り下げることによって、あるいは壁を往来させることによって自己を再構築させ、社会の一分子として存在できる状態にするように思う。漱石は「自分の存在は過去から切り離せない」ものとし、村上氏は「人間の存在は歴史から切り離せない」ものとして描いているように映る。時代による苦悩の現れ方の差異はあるものの、最終的にはいずれも人間社会の中で「自分とはいかなる存在か」「いかに自分という人間であるか」を問いかける。ただ立地的に漱石の場合は「民」としての自分の割合が多く、村上氏の場合は「個」としての自分の比率が高いように思う。漱石の場合は「発見による再選択」であり、村上氏の場合は「発見による再出発」であるように思う。

次に現実の二人の人間を想像してみると、漱石は社会が求めるエリート集団の中の高度な知力の持ち主の一員として在りながら、その社会体制に同化できない中で偶発的に小説家として出発した。その形で国を崩壊へ導く懸念のある文明と戦う決意をし、後世への正しい影響を残そうとした。対して村上氏は肉体労働的商売をしている最中に自然発生的に小説家として出発した。自分の表現したいことを引き出すためにふさわしい場所で書き、後世への影響は想定しない。この二人の環境の違いは時代性の違いもあるが、漱石は内なる孤独を吐き出すための場所を確保し、村上氏は必要な孤独を維持するために世間からの解放の場を都度選択する。それらの環境の中で漱石は「人間は誰しも変わりない存在である」と主張し、村上氏は「結局人間は根底までいけば同じ」と描く。漱石は建前の人間から、村上氏は本音の人間からそれを抽出する。

私が彼らの小説を読む場合、漱石作品では主人公に同調して感情移入してしまう。私はいつも主人公の側からあらゆる心理を見て考えを吸収していく。しかし村上作品の場合、私は小説の中の人々を他人の出来事として外から眺めていて、その考え方を受け入れながらも誰にも同調することはない。形として漱石は現実であり村上氏は夢である。それでも私は二人の音楽趣味から発するだろう「心地よい言葉のテンポとリズム」と「人間の源流を認める奢らない人間性」を共通項として捉えている。(2013.1.5)